

第二十一號

文明之母第二十一號目次

本誌は每月二回三日十八日ヱ發行す

本誌は前金ヱ非されば發送せず

本誌の定價は一冊金六錢十二冊半年分金六十八錢廿四冊一年分金一圓卅錢

全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	(回壹)	(以上二回)
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節は内國通運早遠便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割增

本誌の前金將ヱ相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

主筆　大矢森之助

發行兼編輯人　中村一　東京深川區諸町十三番地

印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地　生文社

氏生保の母松山城中より其子姪の
戦死せしを聞てうれひ色なく躬ら
酒を行りて士気をはげましぬ



文明之母第二十一號



明治二十三年三月十八日發兌

○雜說の一

男女不同權は天則なり

ウヰー、ヘー、リール
闘生記

人間世界に於いて男女兩性の差等なくんば、則ち地上の人民は自由を唱道し、同權を主張そるを得ると夢みることを得べし。然れども神明が苟も男女を作りたらんよは不同權と服從といふことは、また凡般の人生發達の原理と定めたるなり。

當今の急激論者Radicalisueusの最も大膽なる思慮は曰く、男女兩性は天の則なり、數千年來其の禮義を講究し、以て諸立法の銅標よ滅して銷せざるものなり。然るを今不同權なりとし、服從の義務ありとするは、豈是れ野蠻的の暴君壓制の餘流を汲み、粗暴なる腕力の唯々勝ちしといふ印證にあらずして何ぞやと。

此等の論者また何をか謂ふなる、請ふ創世記の首章を看よ。神は婦にいふ、汝の精神は汝の夫に服從すべきものなり、汝の夫は汝の君たるべしと。是れ耶和華が洪水の後にいひし語ならずや。然るに彼のヘーゲル哲學家の門生は、急激なる社會哲學を誇張して曰く、洪水中に人間は始めて人間となりしあり。其の前は極樂園Paradies即ち動物園といふ義なる、園中の柔和なる家畜なりしなりと。此の人間となりしといふ語ともまた女性は男性の下に立たねばならぬといふ關係を家族中に見出だすなり。此の家族中より彼の蒔きたる種より草の生ずると同じく、人民と政治との不同なる關節を生ずるなり。是れ極めて見易きの理にして喋々を要せずと雖も、天下の狀態よりして見ば、土地形勢の殊異なるにより、一國々中自ら殊異なる社會の有樣を存じ、其の社會の生活につき自ら觀る所を異にし、黨する所あるを知らん。已に地勢學と人類學は、男女の同權を駁するものなり。彼の解剖學よりして之を觀るも、人間兩性の有機的の機關は、神經系、循環器より筋肉、骨格等に到るまで一々差異あるなり。此等の差異よりして兩性の職とする所、司とする所各々異ならざるべからず、實に社會上乙は甲に服し、甲は乙よりも優等の權ありと結論せざるべからざるなり。嗚呼、兩性の差異を平均ならしむるを得ざる以上は、社會上にも政治上にも同權同等なりと主張するを得ざるは勿論な

らずや

民間の言にいふ、神明の前にては人間は皆同等なりと。其れ然り、唯々神明の前にては然らん、然れども人間の前にては然らざるなり。夫れ政府に國憲あり、社會に通則あり、蒙古と高加索の人種に論なく、其の内地の人と海濱の人とを問はず、各々宗教的、道德的の一原理を有するあるは、今更いふを俟たず。而して兩性の異なるありて、始めて政府を形成し、社會を組織するなり。單純なる一般社會 Universal gesellschaft は唯々極樂園の時代に於いて存せしなり、實に唯々エヷが作らるゝ以前に在りしなり。而して萬歲の後、或は人間の人間たらざるに到て、初て又單純なる此一般社會を見んとするなり。國土相別れ、人民相限り、各々階級あり、各々職業あり、男子あり、女子あり、政府始めて成る。而して我政府は男子の政府なり、然れども一般政府 Universal-staat は應に中性 Generis neutrius. なるべし。

夫れ男子が直接に政府的の生活を作る間は、女子は家に在りて運動するに止まるなり。唯々家族中 Familie. に潜居すべきものなり。

渾べて國憲なるものは、政治學の形式に過ぎず。而して之と對する政治上の物質は是れ人民なるものなり。是の人民なる學問に於いて、乃ち男女兩性の差等を研究する

なり。夫れ國家の生活に在りては、物質と形式とは常に相密着して、而して存するものなれども、其の物質たり其の形式たり、互に別に論究せざるべからざるものなり。彼の美術家を見ずや、其の內容と形態と、相須ッて而して后、はじめて其の美術なる術藝を現はすなり。單に內容のみある美術は、眞の美術にあらざるなり、形態のみ專らにせる美術は、眞の美術にあらざるなり。兩者相須つて而して美術を成すと等しく、社會の物質は亦法律の形式と相密接して、而して後政府をなすなり。

社會の物質には人民の社會あり、家族の一團あり、國法はよく兩者に相及ぼす。而して政府は重もに男性の有なり。然らば女子は何處に止まるや、彼は實に家族中に潛居すべきなり。

此の家族を代表するものは男子なり。

而して男子は政府に向つて有力なるものなり、政治上の舞臺に於いて劬勞するものなり。然れども女子は政府に向つては一の休する力なり。今此の休する力を以て休せずして働ける力と同等同權なりとするは果して好論理なるや。

嗚呼公けなる生活には、女子の事は一に忘却して可なり。然るに之に同權を附し潛居すべき家族中より引き出ださんとし、また引き出たすは抑々何の理ぞ。

何をか眞の文明といふ、曰く男女の差別をなし、各々其の義務とする所と殊別ならしめ、以て高尚なる徳義を進ましむるもの是れなり。試みに思へ、農婦は其の體力といひ、其の擧動といひ、猶は一半の男子なり。然れども高等なる文化の生活にては、女子は着々男子と相反するの性狀を見はすなり。固より男子は其の家族中に居れども、常に家族外に運動するものにして、家族外に於いては社會の大團結を形成し、政府なる巨塊を揑造し、而して政府なるものは此の勞力勉勵の結果として、遂に一箇の純粹なる男子体を爲すものなり。女子は勿論社會の大團結が進歩するに加入しある者なれども、

彼は家族中に止まる者にして、家族は是れ女子の所有なるものなり。

然れども其の家は、決して其の閨閣にてはあらざるなり。政府も社會も靜止して進まざるときは、女子は跋扈するものなり、佛國の政治衰へて深宮の妃嬪等は、其の纖々たる手に團扇を振つて全國を煽ぎたり。



○こどものため

醫學士　近藤常次郎

今夫れ世よ何が第一に可愛かと云へば子子ほど可愛ものは無い、此可愛い兒が强壯活潑で成育ち、朝に夕に神々しき笑顔を見せたらんには、父母の喜びは幾何ぞや。家內團欒和熟して、月を送り年を迎へたらんには、其樂み極樂淨土も此外に出でじ。

今日世に立ちて、社會の精神と云はるゝ人も、皆昔は小兒でありしなり、今の小兒は他日吾國を經營するの人なり、左れば諺よも小兒の强弱は國の盛衰に大關係あると云はれたるも道理なり。

邦國富强の基礎、家內團欒の快樂の淵源たる小兒養育の極めて大切なるとは、誰人も非難せざるべし。左すれば小兒の病氣で無いと云ふとで滿足してはならぬ、强壯の上にも强壯にする樣養育せねばならず。世間の父母共人は皆此心で居らるゝならんが其處が人間の弱點で、どふも思ふ儘には行れず、中には態々求めて小兒を病氣よする人さへある。これも自分の心では吾兒惡かれと思ふた譯ならず、只養育の方法を誤りたるの結果である。

偖て小兒の養育は大切なる者と知れば、此れより說き起すが順序なれど、今では世間にも注意する人が澤山出來、衛生會にて演說する人もあり又書物も種々有る。故よ此

處では別段說がされども、世の父母は能く〳〵注意して、油斷なきこそ肝要なれ。然れども健康は常にして疾病は變なり、左れは萬一病氣に侵されし時は、其心得肝腎なり、變に應ずるの用意なければ不都合此上なし。病氣になれば、醫者に罹る、是は勿論の事なれり、誰か知らて濟む可き、左るにても弊害の多き事よ、人々能く考へ見玉へ。

とりわけ愛に溺るゝ者、藥劑に依賴する者、家庭敎育を忽にする者、此れほど醫者に難儀をかける者は非らじ。

菩薩の心、夜叉の手、借ても旨き言を謂ふ者かな、小兒醫者の所爲亦此諺の如し。子を持ちたる人々は知り玉はん、小兒の啼聲ほど世に憐む可き者は無い、啼きはせぬか啼かぬ樣にと撫育親の心持、並大体な事に非らず、實に尤もなる道理なるが、間違の起る基なれ。世界に啼かぬ小兒は無い、小兒の啼くは通常なり、左れば啼きしとて決して狼狽す可からず、啼いた爲めに病氣になりし例も無ければ、(病氣の爲めに啼く事あり)死んだ例しも無い。又物心がつく頃に我儘云ぬ小兒は兒い、我儘を云は小兒の常なり、此奴「わんばく」者めと叱り付けた爲めに、眞倒一命を失ふた小兒もあるまじ。

醫者の病人を見るは、實に一生懸命にて、又とない大切なる生命をあづかる者なれば、吾が力のあらん限り、病症を見定め適當の療治を施し綿密の上にも綿密にして、決して 七

手落の無き樣に心掛くる者なり。左れば此の役目の爲には如何樣の事ありとも、診察を疎末にする譯には行かず、是非とも出來る丈け十分に診察せねばならぬ。場合によりては小兒を裸體にすることもあり、手足をれさへるともあり、左なきだに小兒は他人を厭忌する者なれば、十に七八は啼き出す。此時愛に溺れたる父母は、あゝ無慈悲な、非道なる醫者よと恨み憤るとあり、何と無理な譯ならずや。加之醫者に對しても實に無禮千萬の振舞ならずや。（猶後の條にも說かんが一は醫者を信せぬ爲めなり）殊に甚しき實例を擧げん、或家の小兒四才許なるが、實扶的里に罹りて治療を乞ひたり、此小兒脈を診るすらに啼出し、咽頭を見る杯思ひも寄らぬ程なり。なれども三度目迄は無理にも咽頭を檢査したりしが、四度目の時父母の謂ふ樣、先生よ例之小兒が死すればとて更く々恨みとは存ぜず咽頭を見る丈は思ひ止り賜はずや、と實に言語同斷の至り。醫者を何と心得居る者にや、丸で手足を縛り付けて角力とれと云ふ樣なもの角力でもはいとはいふまじ、況して人命をあづかる醫者をや此等愛に溺れたる者は又治療上よも困難を釀す、醫者の敎ゆる如く養生すれば、數日にして治すべきものを一ケ月餘もかゝり、又癒りかゝりし病氣を再發さする等枚擧するに暇あらず。夫れも病氣增進せず幸にして治すればまだしも、萬一夫れが爲に危急の場合よ陷れば、どうもあの醫者は下手だと

恨む。何に致せ醫者の迷惑は夫れ迄としても、小兒の爲には何と實に愛ふべく、又憐むべきの事にあらずや。

（未完）



○待鶯　　畠山健

うぐひすをいつか〳〵と、まつほどに、梅のさかりも、すきぬへきかな。

○くさ〴〵の歌十首　　笠川慶治

雲　あまの原、ふりさけみれば、てゝかして、雲のうきなみ、立ちさわぐなり。

燈　吹きすさふ、風にまたゝく、ともし火の、は影さびしく、夜はふけにけり。

鐘　れもふとち、かたらふほどにいつしくも、ねよとの鐘の、聲きてゆなり。

山　むらさめの、晴れゆくまゝにみわたせば、不士の高ねぞ、雲にそびゆる。

谷　のがれきて、憂世をいとふ、ひとならん、そともの谷に、みゆるいへゐは。

關　千鳥なく、こゑはむかしに、かはらねど、清見がせきは、荒れはてにけり。

森　おほかみの、なくこゑすごく、きこゆなり、夕づきくらき、森の木の間に。

野　みやこびと、來てもみよかし、風そよぐ、まがきの野べの、夕ぐれのそら。

原　武藏野の、こてさしさらを、きて見れば、ゆみはりづきぞ、露にきらめく。

橋　たびごろも、そのやま路の、丸木ばし、こゝろぼそくも、ふみわたるかな。

○人の世

中村秋香

人の世の事ばかりあやしきものはあらず、うしとおもへば何事もうからざるものなく、樂しと思へばすべての事たのしからざるはなし。さかりなる花にむかひ、くまなき月をながめても、夜のまの風をおもひ、さだめなき雲をかこちては、やすき心もあらざるべく、ゆふやみのともし、雪のあしたの鷹狩、たのしとおもへばとそ、しもと高がやふみなびけ、裳のすそぬらし、袖かいさきて、かへりみざンなれ。そも〳〵昨日はけふのむかし、今はのちのいにしへ、あふさきなさの事、さま〴〵ようつりかはりゆくよにながらへて、靜か花にむかひ、月をながむる人、いく人かある。はた花よむかひ、月をながむる心もて、かくさま〴〵に變りゆく世の事ぐさをいとなむ人、いく人かある。あはれ、たま〳〵世

を樂しげにわたるよとみゆるも、ゆふべの照射、あしたの鷹狩にたぐへるのみだ、多かるにや。

○夕鶯　竹屋雅子

空うちかすみて風のどかなる夕まぐれ、そこはかとなくかをる梅が香に、姫君み簾をこしまきあげてつく〴〵となかめたまふに、女房立ちいでゝ、いとつれ〴〵にこそ思ひためれ、いで琴ひきたまへとてとうでけるに、いとれもはゆげにてけしきばかりかなでたまへる御手つきいとをかしげなり。折から前栽の梅の梢に、うぐひすのうちわはせたるやうに鳴出でたれば、ひめ君琴をひきさしたまひて、

ことのねに通ふは松のかぜならで、おきばに近き鶯のこえ。

○秋之夜廼漫筆　醫學士　鈍廼風流士

名言

普魯西國に有名なる教育の大家あり、威是といふ。其の言にいはく、政府の基礎と人民の實力とは一家族にあり、この一家族は主として女性の支配する……爭ふべくも

あらぬ一邦土なり。

獨逸大宰相俾士麥伯爵夫人の記事。

常に伯爵の家に出入する寺院管長チスカルバンク氏の著はせるビスマルク小記より抄譯す。

夫人の髮の色は漆の如くつや〳〵し眼は明く賢しく其の面容は敬愛の色を顯はしまた服裝は露ばかりも飾りたまはず內にこもれる謙遜質朴の氣象を示したまふなり（鉄笛將軍曰、總叙一番、然後說出○謙遜質朴四字一篇骨子○）夫人常にのたまふやう、妾が夫君は名高き人にていはすなればとて、妾も名高き女房とならんとは願ひはべらず却て世にはよく持て囃されぬ程願ふなるを誰ぞ大宰相伯爵夫人などゝいふある、いたましきことにぞある。（又曰、眞是謙遜質朴本色。）妾は天下の爲にいき長へ侍らず、たゞに夫君の爲にこの世にあるなれば、兎に角に夫人閣下がなどゝ世の人より尊ばれ、ものいひかけらるゝは、いとゞわさましくれもはゆなり。ビスマルクが女房の某とさへいはるれば事足りなん。（又曰、自稱夫人、讚之將耻死。）かくてこそいよし昔阿多殿（宰相の名）とかのシエインハウゼン（故里）にてエルベ河畔の土民たりしとき互にたのしき世をすごせしことをも思ひ出すなれ。此の土民なりし妾が夫君は今は全き世界の人となりたまひぬと。（又曰、愈謙遜愈質朴。）ビスマルク伯爵は之を聞き頷きたまひいとしの吾妹子もしもわれらの年經りてはやこの世の塵をいとふ頃には汝ともろと

十二

もすぎにしたのしき世を再びシェインハウゼンの里に送るを得べきなり。又曰、以余見之、在大守村位、慾之小者也、欲退故里沙區保全、慾之大者也なべて夫人は名を求め玉はずかつて法師バンク氏許文贈りてのたまふ樣、妾みづからさへ、妾の身の上につきていかにいふべきや、にしり侍らず、唯妾は呼息あるのみにて世の中にはわりてもなくても同じ身なるを、などゝ謙遜の性質をあらはしたまへり』。さるうへに中々に物事にねむごろよ、またたけくいさましく、心さまいと優にれはすなり。又曰、都前起後、退波斂処。ビスマルク伯の魯國公使となり、聖伯德堡にて、いたく風疾にいたつきたまひし時、夫人は獨乙より之に赴き玉ひ枕の邊にありぬる沃度の藥瓶をみな用なきものよとて、窓の外に投出し手自ら藥品を合せ、其の病床より卽り居玉はずして勞はり傅つき遂に危うかりし命を救ひたまひしことありき。又曰、余嘗編日本婦人傳、有才者、有學者、貞操者、勇膽者、皆有焉、而不見一人知看病法者矣、余殊憾之、今讀此篇、感慨更深。ビスマルク家の夜宴は名高きものなり、夫人は厨庖の事より、種々の調度までも、自ら車馬を馳せて街頭に調へつ、家に歸りては縉紳貴女の款待を何くれとなく取はたらきて、詩にいふ式歌式舞の好宴を盤旋せらるゝには驚かぬ人とてなし。』又曰、正是詩所謂彼君子女、綢直如髮者夫人は名を約翰那といひ、千八百二十四年四月十一日に生る、父をブットカーメルといひ州の豪族なり。ビスマルクハシエインハウゼンの所有主となり、堤防大尉となりし頃、友人モーリッツ、フホン、ブランケンブルク

十三

の婚嫁に際し、宴に侍れるブットカーメル氏の約翰那を見初め、これよりして數々其の家を尋ねたり。或日俄に書をブットカーメル氏に寄せ、婚姻のことを申入れしに氏の驚き一方ならず彼の狂ビス（常に時事と痛論しければ此の名ありしなり）に最愛の孃子を與ふるとは夢にも見ぬ戯ごとにて、斧もて頂門を打ち砕かるゝ心地すなりといひ、又孃の母もいなみながら涙にむせび生くべき心地なしとて暫しうちふしぬ。又曰、良縁不良縁、悪縁亦豈悪縁、日良日悪、本來是空。幾時もなくビスマルクは自ら來りて、約翰那孃を抱き上げ、舅家一族のきかぬをも屑とせず遂に偕老の契を結びぬ、時にビスマルクは年三十二にて約翰那は二十三なりき又曰、比馬克、約翰那、共能富鑑識、而結良縁者、世間幾多青年少女、唯見其跡、欲倣之、所謂如烏於鵜耳、欲無悔得乎哉。



束髪色風琴

其一　もめん綿

迷山人

下　尻に帆かけて雲霞　共上

碑にもある。‖このあたり眼に見ゆるもの皆涼し‖。こゝ那古の觀世音、その景色の好さ。　拭つた樣な鏡か浦に、影を止めて居る軍艦二三艘、木の葉の樣な沖の漁船、ずつと一目に見渡して、其餘り、遠く大嶋の煙まで……それかと斗り。少し右に當て、水晶の摺鉢ふせた富士の山、――これ、れ馴染の美人。姿の方から霞につゝまして、只額際ばかり見せて居る。――人ぢらしな！　陸の方は緑色の松原に、代赭色の砂原、その果ては館山の町よなり。それから左へかけて、さのみ高くない山幾つか起伏し。……時は秋、頂も黄色にはげ掛つて來たが、今日れ天氣に、それを隱す雲も何處へやら。實とに長閑な小春の眺め、氣もうつとりとして、眼の時雨るのも覺えない。

「實に好い景色ネ」

「何とも云へないですネ」

觀音堂の欄干にもたれて、日比とれ綿の二人、暫時景色よ見とれて居たが。やがて其處を去つて、堂の內部へ這入て來た。然し賽錢を上げるではなく帽子を取らうともせず、只上に掛けてある色々の額を、品評して居るばかり。

「本間さん、一寸御覧なさいあの額を。」

十五

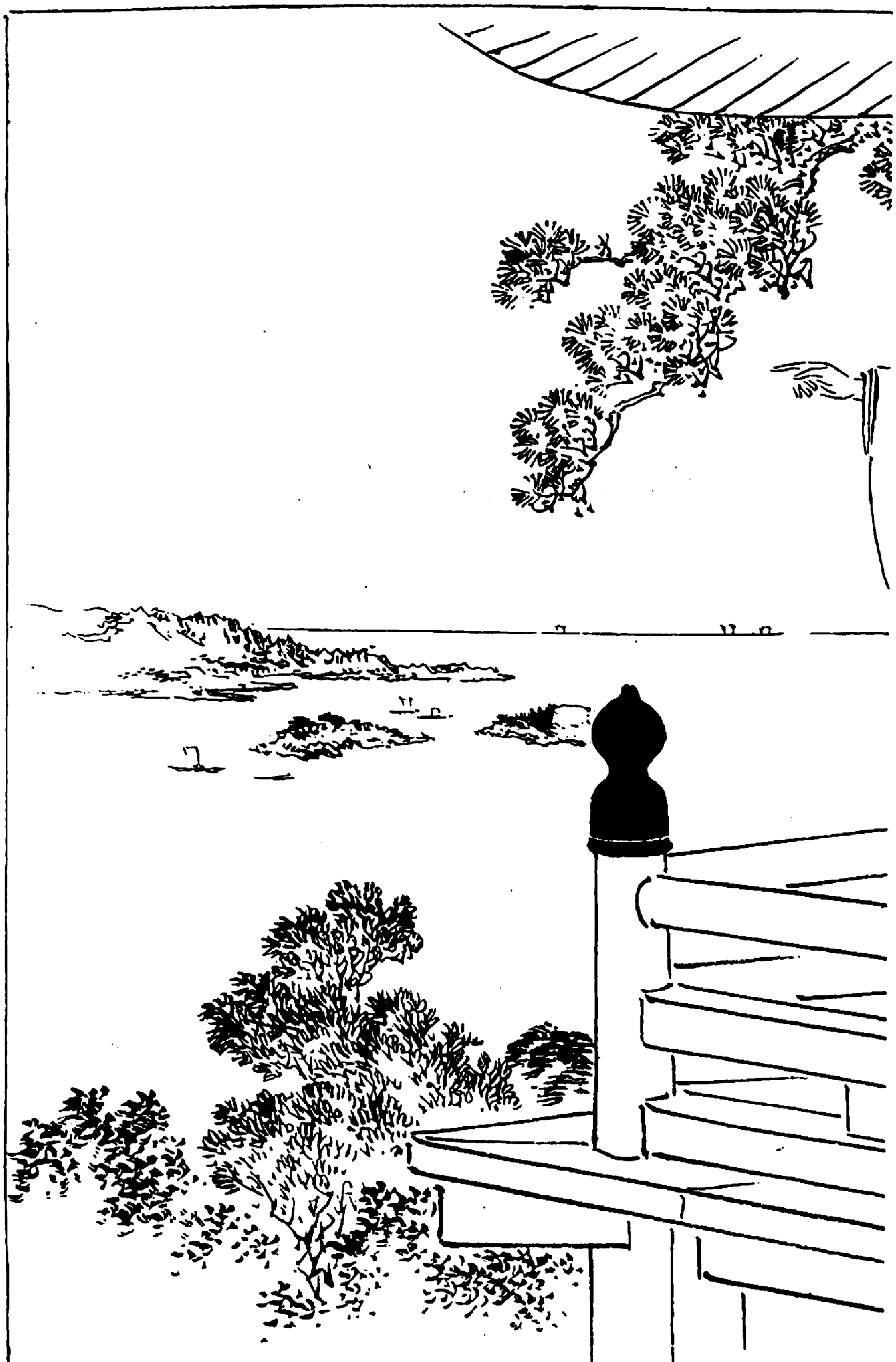
「ドレ……

見れば――いやらしい！　何の由來で誰が奉納したものか。髮はふりみだし角まで生へて、眼付恐ろしい女の躰は蛇に化けた處、巧みよ刻みなして金箔をぬり、さもいやらしい額だから、

「まア、いやだ。何と云ふ額だらう。何だか由來がありさうネ！

「これは斯云ふ由來なんです。昔時此の那古村よ那古長者と云ふ長者があつて、其の長者に那古姫と云ふ一人の娘があつた。ある時此家へ一人の若い旅人が宿を取つた。ところがその旅人と云ふのは古今の美男子で、那古姫一眼見るより戀ひ慕ひ、種々心を碎いて云ひよつたのを、旅人も不憫に思つてか、一夜の情をかけたもの丶、元より一時の出來心のことだから、そのまゝ何處ともなく立つて行つたが、見捨てられた那古姫は悔しくつてたまらず、恨めしい〳〵でとう〳〵氣がちがい、此の海へ身を投げて死んでしまつた。女の執念恐ろしいもので、その妄執が此地へたゝつて、それからと云ふものは、海が無暗にあれて漁が少しも出來ないので、土地の者が忽ち困却に、これは大方那古姫の祟りであらうから、何うかしてその妄執を晴らし亡靈を慰めるに如かずと、そこで此の額を作つて此處へ奉納し、貴い和尚をたのんで供養をしたので、


桂舟



漸くその祟りも無くなつたと云ふのでそ。れ綿は始終眉をひそめて聞いて居たが、

「まァ……こわいとネ。よく貴君知つてらつしやるのネ。

ト、さも感心した体に「日比はふき出して、

「フヽヽ、よく知つてるでしやう。

「あら！　憎らしい、かつぐで。人の悪い方だネー

「かつぐもんですか、事實ですヨ。

「覺えて居らつしやいヨ、女の執念は恐ろしいもんですから。

「蛇に成られちやァ驚くなァ。ハヽヽ。

こんな冗談を云ひながら、地内を散歩して居たが。れ綿は懐中の時計を一寸見て。

「オヤもう十一時過ぎヨ、何處か御膳をたべる處はないかしら。

「そうですネー……貴孃鰻はどうです。嫌ひですか。

「鰻。好きですワ。あつて此處に？

「ありますとも、此處は鰻が名物です。

「そんなら案内して下さいナ。

「それではお孃樣から出で遊ばしませ。
「いやですチー、お孃樣なんて……。
二人は裏手の石壇を下りて那古の町へ出。あやしげな裏路へ曲て、あやしげな家……でも此邊での料理屋某屋の庭口からずつと入れば。それと見てあやしげな下女、先へ立て案內したは、あやしげな奧の中二階。六疊敷ばかりで、南の九尺を窓にして日當りよく、床の間にはあやしげな布袋の一軸、落欵の英一蝶、まづ見る者の腹をかゝへさせる。それに隣つてあやしげな押入、中は何やら見たし。隣室との境は二間四枚の襖、靑い岩石唐紙の上へ、あやしげな文人畵をはりつけた塩梅、何處までも田舍びて居る、——氣取つたつもりでも。
座敷の眞中に敷てある、赤い毛布の上へ二人は坐を占めて、暫らく息を入れて居る處へ、火鉢が出る、やがてお茶が出る。下女はお茶を酌で出しながら、
「浦燒は大きい處に致しましやうか……中串よ……
「左樣さ、中串がよからう
「御酒は？
「本問さん、貴孃お酒はどうです。

「少しは……。

「それでは、一本つけて……あとで飯を。　いゝかイ。

誂へを聞いて下女は立て行く。　其後姿——丈の短い手織木綿の綿入に、メレンスと毛紵絲の腹合の帯を、仔細らしくやの字に結び。　年は十八九か、肉太くて膚白くない處へ、よせばよいに白粉少しわしらひ。　變に癖のある髪を銀杏返しに結つて、火の傍へは置けぬ珊瑚珠の根掛をかけ。　それで得意然と、隨分大きな尻振りながら內輪にあるいて行く格好のよさ。——お綿と日比は……クス〳〵ホヽヽヽ。

間もなく件の下女は、大きな盆の上へ、德利に盃洗、香の物に小皿などをのせて、重たさうにはこんで來。　よい處へ陣を取つて、＝あなたお一ッ＝。　男の方から先へのましてさて女にも。　此處しばらく無言で、三人睨み合の體……。

根が多血性のお綿は、猪口三度ばかり替へるうちに、はや顏は……頸まで桃色になつて、息もせはしさうに成て來た。

「アヽ苦しい、よせばよかつた。

「もう眞赤に成て、一休あんまりいけないんです子。

「それに病中酒なんぞ飲で……自分ながら不養生だ子—。

二十

「これはさつぱり氣が付かなかつた。僕が惡かつて免して下さい。

「イヽエ、妾が生意氣よ飲だから惡いのですョ。

「イヤ罪は僕が冠ります、進めたのが惡いのだから……。そきぢやァもう御膳にしましやう、姉さんァノ飯を急ぐ。

下女はその儘立て行た。

「れ綿さん、こきがもし東京だつたら、もう疾うに讀賣新聞の材料ですぜ、へゝゝ。

「さうチー、だつて此處なら大丈夫だワ。田舎はのん氣でよくつてチー。

「實よ氣樂なもんです。然し宿屋で變に思ひやしますまいか。

「イヽエ、それも大丈夫ですョ。先刻お浪が聞いたから、あの方は實は私の親類だと云つて置きましたもの。――ソラ貴君も兵庫縣でしやう、私も兵庫縣だから丁度ソラいヽでしやう。だから貴君も其積りで居て下さいョ。

「へゝゝ成る程、なか〳〵貴孃も如才ないナ。然し貴孃酒をのんではんとよ躰が惡くなりやしませんか……。惡いとをしましたチー。

「御心配をかけてすみませんチー。……ナニ死だつていゝワ。

左の手を疊について躰を少し反身にし、桃色のハンケチを口へ當て、自分の左方よ坐は

つて居る日比の横顔をヂロリ。日比は少しも氣の付かぬ風で、頻りに鰻を食ひ。また酒を飲まうとしたが、猪口は何時か空になつて居たから、徳利を取て手酌にしやうとするのを、お綿は周章てゝとめて、

「アラ私がお酌しますヨ。

「イヽエ手酌でよろしい。

「そんなよ云はなくつてもいゝぢやありませんか。

無理に徳利を取てついだ。そのはづみに猪口を溢れて酒が日比の膝の上へ………。

「オヤどうしやう。

「ナニよろしい。

「袂にある手拭出さうとするのを、出さしも敢へず。お綿は自分の絹ハンケチで、惜氣もなく膝の上をふいてやつた上句。いかなるはづみか、

「ア痛た。また溢れますヨ。

「ホヽヽ大層らしいチー。

處へ以前の下女が飯櫃を持つて來たので、お綿は急いで舊の席へ直り、それからは二人とも食事に取りかゝつて程なく腹も朽く成た。

「姉さん勘定を。

下女は帳場へ行て書付けを持て來た、六十錢某の拂ひ、日比は自分の蟇口を懷中で捜つて居る間に、れ綿は手早く帶の間から紙入を取り出し、一圓札を一枚下女よ渡した。日比はこれを見て、

「これはどうも失敬でしたネ。

拂ひもすんだから。そこで二人は、椽側に直してある下駄を引かけて表へ出た。見れば、男の右の手と、女の左の手は、袖の下でつながつて居た。

「ちよいと、貴君の手は軟らかいとネー、男の癖よ。

云ひながられ綿は、日比の手を小脇よかゝへ。人間並の指をさも珍らしさうよ。

「ほんとに憎らしい程細い指だヨ……。ちよいとこれがはまるでしやう。

云ひながら自分がはめ居た金に眞珠の付いた指輪をぬいて、日比の指へはめてやり。

「オヤ丁度いゝ、痛かないでしやう。

「エヽ。立派なリングですネー

「ちつとも立派ぢやないワ。それでよけりやあげましやうか。

「イヽエ、もらつちや濟みませんネ。

「ナニ、まだも一個あるから。それは献げましやう、それでもよろしければ……。
「ナアに結構ですとも。ほんとにいゝんですか、もらつても。
「誰が嘘なんぞつくもんですか。マイ　ハート　イズ　ツルー。
　二三町は知らず〳〵過ぎた。するとある四辻に客待をして居た車夫が、傍へよつて頻りにすゝめるので。元より今朝からの散歩で随分草臥れた處。よい程に價をきめて、乗りは乗つたが――生憎く此邊は一人乗りばかり。
　道程一里ばかり時間の三十分ばかりは間をせかれて互に話すともならず。醉がまはつて來たか、日比は車の上で折々船をこぎかけるのを。後から行くお綿は、可笑しさも可笑しゝ。また帽子を落しはしないかと、それも氣遣いで、余所事にも思へなかつた。
　午后三時頃漸く林屋へ着いた。車を下りて玄關から上り、二人ともまづお綿の部屋へ通つて、休息をして居る處へ、例のお涙が茶盆持て出て來ながら。
「お歸り遊ばせ。大層お早うございましたね。觀音様へ入らつしやいましたか。
へー　ずつとお徒歩で、それはお草臥れでございましやう。
　日比は大きな躰伸を一ッして、
「アヽア草臥れた。眠むい〳〵、すつかり知らずに來てしまつた。

「ホヽヽ、ほんとに可笑しかつたワ、車の上で居眠りなさるんだもの。
「さうでしたか。へヽヽ。時には湯はまだかナ。
「丁度よろしうございます。
「そいつは有難い。ドレ、本間さんは先へ。
勢よく立て湯殿の方へ出かけた。あとでは涙が。
「本間さん、先程御手紙が參つて居りましたヨ。
「何處に？
「それは臺の上に載せておきました。
「ドレ此處にあるのかナ。
取りあげて見れば、東京の母からの書狀。封押しきつてよみ下せば、慈愛をこめた母の手蹟。――まづはじめは定りの時候の挨拶から、第一に病氣の見舞。追々よいと云ふ此間は手紙で、少しは安心したが……然しどうも一人で置くのは萬一のことがあつた時、どうにも斯うにもなるまいから、種々と心配し、父親とも相談して、本所の叔母さんをたのんで、留守をまかせ。妾が自身で看護に行くとにした。付ては天氣都合で明後日出立するから、其積りで宿屋へも其事を話して置てくれ。其時に此間仕立てた羽織と、

メリヤスの肉繻絆と、れ前の好きなビスケットも持て行てやるト。――涙が溢れるまで有り難い心盡し、掌をあはせて拜んでもよい程。――が、時も時、折も折。今母親に來られては……。手紙膝の上へ置いたまゝ＝サア如何仕やう？、困つたネー！。

○美人車の著者思案外史謹んで文明の母愛讀の諸君に謝し奉る、外史多忙に取り紛れ知らず〳〵此美人車の續稿をづるけし事、實に二ヶ月に亘り數號に及べり、平素讀者の好意に背く事甚だし、該般漸く俗事を排除して又此紙上に諸君と見ゆ。此編も最早二三回にて局を結ばん、幸に倍舊の愛讀を賜はらん事を御無沙汰の御詫かた〳〵如此御座候早々以上。

美人車

飯台　思案外史作

其五――愛らしげな鉢の姫小松。

「今日は少し御退出がれ遲い樣でムいますネ。」

ニコ〳〵笑ひながら問ひかけたのは駒形芳文の令夫人愛子です。

「今日は役所の歸りがけ鳥渡吉本の處へ寄つたから夫れで常時より少し遲くなつたンだらう、

洋服の外套を脱いて火鉢の脇に足を投げ出しながら答へたのは此家の主人駒形芳文 二十六
です。

「さうでございますか、吉本も皆樣御變りもない御樣子ですか？

「アヽ　みんな丈夫な樣だよッシテ歸る時にお琴さんがお前にくれ〴〵もよろしくッてチット御天氣のいゝ節遊びよおいでッて、

「さうでございますか有がとう　嘸梅チヤンが大きくなりましたらうねヱ、

「アヽ　暫く見ない内に見違る程大きくなつて今日なんぞも私の前へ來てチヤアンと兩手を突いてお辭義をしたよ、

「オヤさうでございますか、アノ位小供で可愛らしいのは少なうでございますチ　オホヽヽヽ

「お前も早くアンナ可愛らしい小供を持ちたからう？

「オホヽヽヽやッぱり自分が持ちまそと、とんだうるさいものかも知れませんよオホヽヽヽ

「餘計な噺話で着物を着替るのと忘れて仕舞ッたッ、

「さうでございますこと、妾もスッカリ忘れて仕舞ました　オホヽヽヽ

云ひながら妻君は立つて次の部屋の隅に置いてある炬燵に掛けてあつた日本服を持ッて來て夫の前へ出しました。　夫は又モーニングの上着を脱ぎチヨッキを外づし今ヅボンを取らんとして居た處、妻君は自分の持つて來た着物を脇へ鳥渡置いて夫のヅボンの先を兩手で採ッて遣りながら、

「フランチルのシヤッは着ていらッしやる方がよろしうございますよ、又れ風邪でも召すといけませんから、

「さうだねヱ、

云ひながら夫の立つのを妻君は後方からチヤアンと揃へてある日本服をフウハリと掛けてやりながら、

「こちらゑれ帶を………

出したのを夫は取ッて〆めながら、

「どうも何時までこんなに寒いンだらう?

「妾の考ではまだこんな事では濟むまいと存ドますよ、

始終笑ひながら嬉れしさうに夫の顔を見て居ました、

「ツノ足袋を取つてれくれ、　「ハイ

夫は足袋を穿いて仕舞ひ火鉢の向ふ――机の脇へ据りました。妻ハ又此方の隅で夫の脱ぎ捨てた洋服をそれ〴〵たゝんで居ました。夫は火鉢の脇にあッた煙草盆を自分の前へ引寄せ煙管に煙草を附けながら火入の前へ挿んである郵書を取ッて封押し切ッて讀んで居ましたが、

「誰か已の留守に來客はなかッたかい？

「ヘイ誰方も……イヽヱ吉川さんがさッきおいでになりまして貴郎がお留守だと申し上げたら――立ちながら――先達の事はお陰様で漸く結局が附きましてどうもいろ〳〵有がとうムいますすくれ〴〵も宜敷申し上げてくれとさうおッしやッて何れ其内お目に懸ッてゆる〳〵御禮を申し上げるとさうおッしやッてお歸りでした。

「さうかい……何れ又近日過ふだらう。アレも感心な男だなか〳〵親切な男だ。已の處へ書生に來て居た時分はカラ暴れ者で仕様が無ッたが今ぢやア大學を卒業して立派な官員になりをッた、

「オヤさうでございますか。これご覧あそばせ大層なゴミでございます、お車よ召してさへコレこんなにホコリがたかりましてお召物が大なしになります、

云ひながら刷毛で洋服のゴミを取ッて居ましたが、




桂舟

「アノゥ上野の博覧會は何時頃から始まるのでございます？

「上野のかい、上野のは四月からだらう、

「博覧會が開場よなりましたら嘸上野は賑かになりませうねェ　櫻花も恰度咲く時分でございますから、

「なんてたつて日本一の大博覧會だから諸國から見物人も上京するし嘸雑沓する事だろう、

「開場になりましたら千代と一處に參りたうございます、

「アヽ〳〵行ッてご覧とも　外國からわざ〳〵見物に來る人さへあるから日本人で見なかッては耻になるよ、

「千代で思ひ出しましたが仲働ト申せばどうも毎日〳〵請宿から連れて參りますがいつも長し短しで困りきりましたが今日參りましたのはトンダ氣立のいゝ音なしやかでどんなよろしうございませう、先づアレに極めやうかと妾は思ッて居ります

「どうも小間使の千代ばかりでは、矢張用が足らないでいけないから今日來たのが音無しくッて役に立つのならソレに極めたがよからう

今日來た仲働とはソモ誰れ？　又其仲働とやらが此夫婦のいと睦ましげな光景を親しく垣間見たらマアどんな感じが浮ふものだやら？　人間万事塞翁が馬！

（未完）



○讀琴水女史定家卿雨中吟之批評　　濱町　みどりのや主人

れの文明の母第十八號寄書中に掲げある大坂琴水孃が定家卿雨中吟の難評を讀んで實に孃の卓眼高識、其深志豪膽なるに驚きたり。去り乍ら此雨中吟は世に未來記雨中吟と唱へ、松井幸隆の聞書、加藤磐齋の三部抄增註、其他定家卿自らの三部抄、和歌七部抄杯にも出で古くより隨分諸家の說ども有りと雖、素より定家卿が眞面目に詠み出られたる歌には之れなく、女史が瑕瑾と見認めたる所（附會の說もあれ共）こそ却て卿か本意とせられたる所なれ。抑も此雨中吟は女史も既に述られし如く、後世歌と詠ずるものゝ警戒に、態と瑕疵を求めて詠まれたる者にて、既に三部抄を見て、未來記雨中吟の

歌の風体のあしきを知り、未來記雨中吟を見て、秀歌大略百人一首の歌の正風有心にして姿清く心高き趣を翫味すべし。云々、と有るを伺ふても、決して之を手本にせよとにはあらで、却てよますまじとの深意なるべし。去れば尾崎雅嘉か群書一覧にも左の事柄を載せたり。

(前略)此書を未來記と稱せらるゝ心は、後生の輩歌と詠ずるに、ふるきすがたの長高く優にして正しく又やさしきさまをこひねがはずして、たゞひたすら新らしく工みよ詠じ出さんとするゆゑ、却て邪路におもむき、すなはならぬ詞をつゞけ、聞なれぬ名所草木等をよみ、又近代の秀歌をぬすみとりて、心をかへ詞をあらためておのがものとし、家の庭訓を侵し、先達のをしへにそむき、我こゝろにまかせてめづらしく我とおもひ得たる筋によみなし、人毎に又これをまなびゆかば、正風の体をうしなはんとを考へたまひて、詠じおかれたる歌ども也。云々。

雨中吟十七首、これも定家卿の自詠にて、奥に此風体をさかりに好み、よまん時、歌の道はやすたるべき世至れりとしるべし、ゆめゆめまなぶべからざる躰也。此頃もかやうのすがたのおのづから見え侍るべし、依て後學の為にしるしとゞむるなり。云々。

宗祇抄に云、此十七首未來記同前には侍れど、別よ此名を雨中吟と号する事、もつとも

三十一

子細あるべし。此名の外に体なく、躰の外に名なし、体とは歌の風体なり、雨聲暗明の躰ともいへり、風体あしきをしらしめんの歎なり。たとへば霖雨のものむつかしく、うちたれはふやうにて、くらきかとみれば又あかくなり、明らかなるかとみれば、又くらくなりて、朦々としていひしらず、こゝちたど〳〵しく、山河草木のけしき、鳥の聲なども打しほれたるやうの時あり。さやうの折ふしは、あらぬ愁もそひて、物いま〳〵しくことわり見にず、思へどもとかれず、あまねく聞ゆるやうなるも、心詞通らず、むすぼるゝやうにあるを、雨中の心にたとへて雨中吟といへる也。云々。

　未來記ははなやかにせんとしてとやうになりたる也、これは案し過して鬱したる也。云々。

女史もこゝに着眼せられたらんには疑惑も晴なん、浩歎も止なん。去るを「また可笑しいのは、其の十七首が矢張奇で珍な事です、成程鳥渡そのまゝ讀み下せば、如何にも恐く名吟の樣ですが、深く考へれば皆瑕疵が有ります」。終りみ至りて「大家の作と思ッて想像で讀むからの事で、平心虚意で考へて見れば、定家卿といふ大家か斯かる奇なる歌を咏せられた事を嘆かねばなりません」。抔酷評せらるゝは何事ぞ。近來新古今時代の歌詠み、多くは世に價値を失ひしと雖も、決して女史か歎かるゝ如く定家卿豈かゝ

る劣等なる歌詠みならんや。彼の三夕の歌一首にても十分此道に堪能なる事は推知せらるべし。

序でながら琴水女史の詠歌に付て伺ひ申さん。同号に掲げありし、初春風といふに「草も木もめぐみわまねき」とは春にいひ掛けたる働きなるべけれども三の句、あら玉になびきそめぬる」を斗りにては聞えず。且あら玉の年、あるは月日、あるはひと夜杯とてそはいへ、單にあら玉といひては何の事なりや調はず。初春殘雪「降りつもる去年のかたみと殘る雪」是亦聞えがたくや、四五の句「はる立けふの風やとく覽」とは古今集開卷第一、紀貫之か「袖ひちて」といひる歌の下の句には候はずや。妄評多罪。

○小説群芳二號附錄

「紅懷紙」評判

大竹忠太郎

紅懷紙――トばかり聞いては、口善惡なき京童は、美濃紙の類にや杯と申すなり。シッ不所存者奴！

そもそも此小説といっぱ、先般讀賣新聞紙上に、現はれしものにて、此度引眉毛して、「小説群芳」二號の附錄となり、左褄とっての再勤。(細見にあらず)之れについて、思ひ起すことあり、いつぞや美妙齋氏の、「夏木立」を評して、引眉毛と云われし方様ありしが、其名前を失念せしこそ殘念なれ。　著者は當時日の出の花形、愛嬌作者の紅葉仙人、文体は其得意の元祿振、もとより惡い筈なく、近來の御傑作と、開卷より大尾に至る迄、倦まずに目藥樓下に出で、一息に讀み了り、あッとばかりに絶叫せり。　或る批評家は思案外史を明治の春水と申

されたげな、小生は紅葉山人を明治の京傳と申さうぞ。いでや之れより評判仕らむ。

表紙は例の紅葉好みにて、乙なり。紙數は僅に二十三頁の短篇なれど、其面白きこと山人の出世小說なる「色懺悔」より、優りたりとて劣らじ。彼はトラゲヂーなれば、序幕よりどん詰迄泣き通しにて、氣の弱き小膽者の小生などは、胸ドキ〳〵思わず貰ひ泣きし、胸を痛めて寶丹の厄介になりし程なるが、彼れと此れとは、丸で月と鼈、陽氣に戯れッぽく、可笑く、配劑眞實にしてよく、趣向も平易にして別に斬新奇拔の處なきも、さら〳〵として彼の潺湲として流るゝ小川の如し。五助の花妻太夫を慕ふて、八年の後身の代金とゝのへ來り、太夫の死せしと聞き失望のくだり、田舍漢の質朴の風、だ手に入ッたもの、只感服〳〵と申す外なし。試に二三の名句を擧ぐれば、一頁「……遊女に馴るゝことを男の花として、揚屋酒に浸らぬ腸は和かずと、伽羅ぷンと香う間に、十百兩消えてもうれしがり……」の如きは、何等の好文字ぞや。當時の人情寫し得て妙ス。又十四頁「……手織木綿に伽羅の香染まして、十年もこれから居續けする贅澤男、われらの齒に合ふた百姓ではないが……」とあり、尋常小說家の及ばぬところ。二十三頁「……こは何處へと人々尋ぬれば、南無阿彌陀佛、太夫の墓參」、として筆を止られしは、餘情其裡に含富し、確か〳〵、ト贅辭ばかりにては提灯持やら批評やら、分明ならねば、斯樣な傑作に黄啄を入るゝは、身の程しらぬ嗚呼の業なれど、思ふて云わぬは、腹ふくるゝわざと、ゐが岡氣取りにて、ポッ〳〵爪汚程の瑕疵らしき所を吹聽せむ。

なにはさて、癈娼論など、喧しき世の中に、此作あるは山人の大膽、無遠慮、ちと御人體が……と仙臺萩なら沖の井の申すところ。さて二十一頁に「……八年が間に村隨一の分限者となりすまし、……」其頃は松の位の太夫を身受するには、莫大な金なそうな、然るに其日暮しの水呑百姓五助が、何程節儉せしとて僅々八年間に、村隨一の分限者となりて太夫を身受するとは……ちと請取れぬ話。それとも五助どのは空米相塲でも買はれしか、?但しは白波の荒仕事でもやられしか。?又所々江戸訛も下方訛と、予質するは惡るし。其外は此所ぞといふ瑕疵なけれど、之を一束に總評せば、下方仕込みのこッてり種にて、ちとダレ氣味あり。其上野俗賤劣にて猥褻の所多く、特に

二十頁五行、二十三頁七行の如きは甚だ野卑なり。　紅葉どの、餘り見識を低め過ぎたなされ方、以來はちと御謹愼あつて、筆を採られた方然る可くやに存ずる。　しかし之とても完璧の微瑕のみ、まづは近來の大出來、いで〳〵讀めや讀みたまへ、小說好の方々よ。

附言、百月蛇に恐れぬ惡口、失禮の雜言過言、お氣に障らば幾重にも座蒲團をすべり下り、平蜘蛛の如く額を疊にすりつけ、叩頭して謝罪申す可し。　小生は一体全体月夜に我陰を見て、總毛だつと云ふ臆病者なれば、暗殺などは御免〳〵。



○佛國之婦人　　　　鈍の風流士

是の如く我れ聞く、佛國女子の過半は、文字を書くとを知らず、其三分の一は書きし文だも讀み得ぬ者なりと。渾べて文よみ得る女子は、致ゆるとをも得るといふ諺は、中々佛國の女子にはいふべくもあらず。されどもまた驚くべきとは、佛國の女子は皆な妍麗妖冶にして人の心を移ぞ者多きにぞある。彼には尤物多く、その美ある纖身をあやしくも飾りなすとに巧みにして、不思議なる魔術あるやと迄疑はるれ。其擧動のすべて裊娜なる、其足の輕少にしていみじき、何處の國に其比をや見む。

彼は不思議にも最至福なる才智を備へたり、之を庠序にて學びしにあらず、またかく教育せられたるにもあらず。しかしていとも賢こき聖をも、博き學者をも白痴ならしめ、鼻の先きに頤の端に弄び、いかに怒りて吼る男兒をも噓然としてゑましめ、時としては、歐羅巴の治亂を輕譟なる柔荑もて握りたりしは幾度か。

南と西の歐羅巴婦人とは、北の國の婦人が具ふる天稟の女性は少しく欠如るにやと思はるゝなり。其音聲の猛しきは其徴なんめり。其感情の密にして、深きよりて、佛蘭西の女子は人の腸を斷たず、其常に爽快よして、洒落磊りなき、機嫌は却て男子が消魂の種となる。絹の纖に炎き日を避くる馬車に軀らせ、先君の財産を錦繡の衣服に耗盡せしめ玉ふなる貴門の姬達、夫人を始めとし屋根下の牕に停り烟に薫はる壁に向ひ刺繍なし、夜に入れば野乘小說昔し語りよ、心よく笑みつ罵しる賤の女に到る迄、其感情は深からねど活潑なり、其精神は興奮せられねど愉快なり、其思慮は發達しあらねど、火花を散らし火焰を吹けり。石にあらざるも容易く轉すべし、席にあらざるも忽ちに卷くべきなり。人の目を眩ますべき出立、人の心を衒すべき風流は、衣にも住にも手の動くところにも心の走るところにも、いたらぬ隈ぞなきなり。

外貌の扮粧には鷹隼の服よりも銳き眼にて、判じては評しッ人の心に適し意に投せ

しむる樣に飾りなすと以て巧みにて百の年月經たる昔しより、巴里の時世粧は常に全世界を支配するなり、また佛蘭西の女子は見識ある巧者なり、好むで職業學校 Ecoles professionnelles に往來し、實地の業を事とする者その若干なるを知らず。巴里の都には常に女子にて端麗やかなる靴を造るもの一萬人、刺繡をなして暮すもの一萬五千人、男子の衣服を裁縫するもの、器具を磨くもの、漆ぬるもの、絹を織るもの、肩掛を編むもの、大理石を硏ぐもの各々一千餘人を計ふなり。

斯の如き實業をなす手弱女は、概ね嫁し付きたるものなり。されば日夜の手業にて家の經濟はいふも更らなり、順序も制度も治むる暇とてなく、そが家に坐するとだも多からず、子を顧みて敎育し夫を助けて內を治むる杯は、思もよらぬ事にてあるなり。是れ表に顯はるゝ舞臺の有樣なれども、內幕なる樂屋にては如何なるべき。いふも恐ろし、佛蘭西の女子がかく不德よ、かく不品行なるは。

夫婦の和樂、一家團欒の歡などは更になし、離婚成り易く、落魄失路また易し。自ら活するの途もなし易ければ、結婚もまた易し。淫縱は己が隨意のみ喙を容るゝは誰ぞ。かの革命の乱世には高く裳裾を褰げ、美麗しき衣を着、帽子には鳥の羽を挿みて飄めかし、匕首を手にして無頼の者を嘯集し、血の雨ふらしつ、腥き風呼びつ、又其後にも幾度か

狂ひ廻り、男も女も差等あらじと罵りつ、或は尼寺に入りては肉慾を主張し、花に濺ぐ如迸に油を滿たして火焔を煽ぎ、或は巴里城の圍の時、珈琲ひさぐ家に酒宴の圍坐を作りあられぬ醜体と振舞ひ、或は美服をうがちて東西に哮吼り、爭を求め仇を作り、瓢の犀の白き歯に火筒の縄を切り放ち、胸を透して自らも果敢なくなるを心地よしとなせ。あゝまた何とかいふべき。

佛國の女子は放縦なり、審美高尚の心は滅びたり、嬌羞の情なく、廉恥破れぬ。婦は其夫の妾あるを稱道を恥ぢず、母は其子の情人あるを公けにするをも怯れず恰かも是れ羅馬國の末世にして、また其頃の如き者に非で、詩想は鄭聲にして稗史は邪色なり讀みて飽かず學びて剰さず、婦の徳は地を掃ふて空し。

子生れて之を桎梏なりとし、無智の乳母に放ち遣り、保育院に、幼稚園に逐ひ遠ざけ、日々の樂みなる母の務めもえ知らず婦たる道もまた然り。是ぞ今日佛蘭西社會の衰微したる原因といふべきなる。

○婦女子が談話の時に於ける心得

菅菰の彌陀れ

春の夜の長きに燈火挑げて、友垣三人四人と宇治栂尾の品定めしつゝ、種々の物語り

いと優にもまたたのしきものぞかし。

さて此の物語りにつき心得べきことあり。

第一、心よき談話の二大敵。

きれもせず物がたる口のはしり過ぎたる。

怯れ羞ぢて中々よ物いひ出でざる。

第二、六ッの掟。

躬親らの事につきては成るべくものがたりせぬ。

巳れ獨りのみ其の座まてものがたりすることをやむる。

傍の人の物語りをうながすよし。またその人の物語り半よ角立てゝものいひかくるにくし。

物語りする中疲れてしばし打絶ゆるわろし。

ものがたれる事柄を全くいゝ盡さずしてなほ少しいひのこす。

伊勢や日向の物語り、忽ちかけはなれ、或は首尾そろはぬものがたりよろしからず、輕く妙に何氣なく話の口を他に移すよし。

○餘興

左の一篇は昨年十一月本誌の毎月一回なりしを二回となせしの時、投寄せられしものなるが、印刷所變換の際、誤つて其の原稿を混雜の間に失ひたり。其の後郵書を以て再び寄贈せられんことを請ひたるに、氏の懇切なる、吾人の疎漏なるを恕し、又之を送られたり。乃ち今之を掲ぐるも、實に昨年十一月に寄贈せられたるものなることを、殊に讀者に注意せざるを得ず。

文明の母を讀む狂言　浪越　脫花樓主人

是れは日本橋の片傍に住む、文明の母でござる。妾文明と申す兒を産んでより、殊の外仕合せよく、一月一度づゝ日本廻國いたしてござれば、あちらからも文明、こちらからも文明、とお贔負なしくださるゝにより、喜びのあまり、此の度思立ち、毎月兩度づゝ回國いたさうと存ずる。それにつき、今日は最上吉日とあれば、文明の誕生を祝ひ、少年園の衆々を始め、それ〳〵招ひてあれば、いざ酒を進めばやと存ずる。……是れは何れも方、よく來さしました、大慶でござる。去りながら、何も珍しき思考もなく、御慰も渺くはあれども、さア〳〵きこし召せ〳〵〳〵

客　今日は御心に懸けさせられ美味珍膳ないたゞき、和酒もあり、洋酒もあり、何れも銘肝な致してござる。母ぢや人にも、一つすぐさせませ。中略

客……。

時に一さし舞ふであらふ。

諸「抑々文明の母なるは、女ながらも、敷島（酒名）の、大和魂（仝）、正宗（仝）の強みもありて、其の味は、男山（仝）よも、勝れたる、女釼菱（仝）、色娘（仝）、惣花（仝）の香も、色よ出る、猿若（仝）街の顔見せに、智恵の程こそ、知られけれ。ヨイヤ〳〵。今日は如何なる、吉日ぞ、名だたる（灘）酒を、くみかはし、いたみ（伊丹）入りたる、饗設に、日本堤（酒名）も動き出す、計りに酔ふてぞ、うれしけれ。

さらば此の母も、一さし舞ふであらふ。

諸「さて文明の前生は、今を去ること四百年、人皇一百第三世、後土御門の御宇とかや、年號に產れ出で、折しも鬼も十八年、太田入道道鑑が、千代を祝ふて、千代田にて、始めて、築きし、江戸の城、千代田の稻荷の、化現にや、折節白狐あらはれて、尾を曳き回りし、跡を見て經營なせし、所以を以て、尾曳城とも云ひしとかや。其の尾をひきて、德川の、流れ久しき、三百年、再び其の忌よ、生れ出で、所は名にあふ、武藏野や、雨の古にし、その昔、江戸紫の、色ならで、折りて差出す、山吹の花ならねども七重、八重、いま九重の都なる、大傳馬町の、生文社、其の名も淸き、玉川の、水を產生湯に、つかひしより、初は味子、なりにしが、二ツ（二総）の乳房をくゝまして、繈褓（陸奥）の内に、肥立（常陸）ちわげ、坂東太郎と、名乘り出で、無き名（安房）は取らじ、名取川、岩木（磐城）も徹す勢ひに、人は何とも、言はしろ（岩代）の、望むる言も、得ぞ（蝦夷）知らぬ、ヨイヤ〳〵。

思ひ出羽の旅衣、〳〵上につけ、下につけ、品のよしあし、見こし路や、かゝみの宿は、曇らねど、人の妬みにあふみ路や、まけじと競ふ、關が原、右と左りの中山道、をはり通して、神風の威勢い八洲に、はびこらし、回りてこゝに紀三井寺、めぐみも深き、父母の粉川寺とは、是れやらん、忠臣孝子の湊川、つきぬ泉ぞ、源は、河内の國より、流れけん、親の恵は、深き洏高き山とも、たとふべき、忠節つくせし、正行も、母の思ひがあればこそ。大和花の都は、猶更に、四國の果も、西國も、今は殘せし方もなく、實りひろめしぞ、めでたけれ。はむるのみかは、世の人も、母の教を尊み、見るかひありと、云ふならん。直打にするが、第一と、關東言葉の、何ペーヂ殖やして出づる、紙數よ、實れの多さが、見ゆるなり。ヨイヤ〳〵。

イデ〳〵是れよりは、天眼通や、天耳通、目蓮尊者も、傭ひ出し、十一面に見張をさせ、書記よは千手觀音あり、韋駄天に配達させ、我等は鬼子母善神とて開化をさまたぐやつばらは、片ッ端から、かむで捨て、文明なる子は千人より三千九百萬人まで、育てあげんの誓願なりと其の聲天地に震動し、〳〵富士と築羽の山よりも、鼻高々とのたまひける。産める母こそ尊けれ、生れる兒社目出度けれ。ヨイヤ〳〵〳〵。

徵古隱語 四書之部　　在神田　中村隅水

一(問)　痴人疑地球。以論語一句解之。
二(問)　二十九歳枯坐。仝上。
三(問)　青黃黑白皆不可也。仝上。
四(問)　妝奩。仝上。
五(問)　惡木之生不宜山恥之。仝上。
六(問)　圓者三四十其餘幾許。仝上。
七(問)　孔子爲乘田。以論語人名解之。
八(問)　孟。仝上。
九(問)　睢陽城。以孟子一句解。
十(問)　鐵冠。以孟子人名解。

(以下次號)

右はあまりむづかしきものですから、懸賞の考物よはしません、唯讀者の餘興に具へん爲、且は寄送者の好意に背かざらんが爲、玆へ掲げました。解は次號へ出し升。

懸賞考物

1. 戸の下に、一ひら落ちし、鳥の羽を、ひとのながめて、何といふらん。
2. 背乾せば、何日の間にやら、鳥の來て、骨をくらふて、身がはりになる。
3. 鐵道の、道うづもれて、おともなく、池の水莖、咲きにはひけり。(或雜誌の主筆記者)
4. 西洋の或る古い大國の帝王で、其の王の名は、丁度其の人の最期を言ひ顯はしました。誰れか。何故(なぜ)か。

5. 英語よて七字綴を以て成り、若し初三字を和譯し、後の四字を音讀の儘之を邦語に名ずれば、共に同一の植物の名となる、其の原語如何。

右　兵庫　菅原永大郎氏出題

6. 妾の友達に性二字、名一字の人が居ります其の上下の字を取ッて讀めば古へ蝦夷を征伐した人となり、又其の殘りの字は其の字の位置で知れます。何といふ名でせう？

右　山口　坪井みち子出題

7. 二頭四目二鼻二口四耳を表し、二足よて歩行するものあり、何か。

右　志學　臨光寺文達氏出題

○前々號（十九號）の考物の解答は都合よよりて次號に讓りました



〇皇女御對顏

去月二十七日は房子内親王周宮殿下の御降誕後三十一日に當らせらるゝを以て、午前九時三十分青山御產所御出門、御養育掛佐々木高行附添ひ奉りて、宮城内なる賢所へ御參拜の上、天皇皇后兩陛下へ始めて御對顏あらせられたるやに承る。

〇アッケルマン孃

アッケルマン孃とは如何なる人ぞ第二のレビット夫人なり、人心を攪醒し、禁酒の事業を擴張せんとするものなり。 飄然家鄉を辭して世界を巡遊し、文明國にても野蠻國にても、凍天にても爍地にても、敢て辭せず敢て避けず、往いては王公にも說き、蠻民にも勸む。 吾人は其の去年一月米國を出立し、既にハワイ、ニージーランド、タスマニア、アウストラリア、シンガポール、サイアム、南文那等、經歷したる所悉く其の冀望するが如くに矯風の大事業を仕遂げたるやを知らず。這度また我邦に來りても、或は橫濱に於いて或は東京に於いて、晴となく、雨となく夜となく晝となく、頻りに演說するあるも、孃の爲めに幾人の禁酒家を增し、幾人の道德家を殖す可きやを知らず。

或人は曰く余親しく孃の演說を聽けり、然れども其の禁酒に就きて論ずるは、津田仙氏に優る處あるを見ず、其の道德に就きて說くは、西村茂樹氏に劣るあるやに覺ゆ、斯くして尙世界の人類を說き勸めんとするは妄信も亦甚しい哉、虛望(アンビッション)もまた甚しい哉と。吾人笑て曰く、咄何をか云ふ、纖々たる一少女の身を以て、錢一錢と貯ふる所なく、人一人を伴ふ所なく、國のあらん限り、人のあらん限り、持說を主張し、所見を論議し、罪ある吾人々類を此の地獄より拯はんとす、其の大胆實に感ずるに餘りあり。 其の人物の如何、其の論說の如何、其の成功の如何、其の結果の如何は固より問ふべき所にあらざるなりと。

〇チリー、ブライ孃

右の一項を記して吾人は憶ひ起す、昨年七十二日間世界周遊の目的を以て、米國ニユーヨーク「ウチルド」新聞社より出發したりしチリーブライ孃なるものありしを。 吾人は其の日本に來りし時、聊か本誌に論じたることあり。 曰く孃は今年廿二歲の妙齡なるが、既に地球面の過半を掠め去り本月三日橫濱

に來れり。來りしかと思へば七日よは既に去れり。三日間の瞥見果して何の得し所ある、七十二日間の周遊果して何の見る所ある。 然れども國に歸れば乃ち曰はん、妾は世界の周遊を仕遂げたるものなり、萬國の形勢を實見したるものなりと。 一隅よ三日ばかり逗留して、日本の實況は云々なりと、口頭に上せらるゝも片腹痛きことにてそ云々。 (第十八號彙報欄內) 果せるかな、孃が國に歸ると齊しく、「ウオルド」新聞は大なる法螺を吹き立て始めたり。 特に本年一月廿六日の同新聞よは、孃が七十二日間よて巡遊したるものを一個の雙六よ製したるが、其の見たよ所、聞きたる者を其の國其れ地に書きたり。 印刷如何よも不鮮明にして、何の何たるやを知るに苦しむ位なるも、我國の横濱の部には昔しの駕籠に乘り居る樣を描き、東京の部には大なる偶像樣のものを出だせり。 嗚呼日本人たるもの之を見て果して如何なる感覺ある、嗚呼外邦人たるもの之を見て果して如何なる感觸ある。 數日間の瞥見を以て斯く事々しく書き立つるは、吾人其の意を知るに苦しむなり。

〇讀賣新聞に勸告す

過を改むるに憚るなきは正人義士なり、君子なり賢者なり、吾人は夙に讀賣新聞記者の正人義士なるを知る、君子賢者なるを知る、故に彼の女學生の醜聞の件に就きては、必ず斷然其の果して無根なりしを謝告し、想像に出でしものなるを謝告し、併せて徒に小說的の文字を弄して女子敎育に影響を及ぼせしを大謝せらるべきを信じて疑はざりき。 然るに怪しい哉、今日に至りて未だ其の事實なりしを主張し、其過ちなきを論じつゝあり。 嗚呼讀賣新聞記者よ、何ぞ早く其の過ちを改めざる、吾人か嘗て信じたるが如く果して正人義士たらんよは、果して君子賢者たらんには。 吾人また決して勸告すべからざるものに勸告すべきを欲せざるなり、唯讀賣記者には實に勸告せざるべからざるの事實あればなり。 何ぞや。

〇事の詳細を知りたくば

幸に我社に來れ、校名、人名、年齡、事實、一々記者に示そべし云々と、讀賣記者は去る日曜日の紙上に辨じたり。 其は勿論斯くあらねばならざるなり、充分人を論難し攻擊し、而して其の論難攻擊すべきの事實なくんば、是れ重大の罪人なり。 加之我社に來れば之を示さんとは大よ好し、實よ又斯くわらねばならざるなり、如何なる事實にても他人に見るを許さゞるもの、焉ぞ他人之を事實と認むるを得んや。其の方法こそ拙なれ、讀賣記者が彼の醜聞を敍述したるは、成程正確の事實に依りしものなるべし、吾人も一たび其の日就社を叩きて、校名、人名、年齡、事實一々詳細に知るを得んと思ひ居たるに、女學雜誌記

者は早くも先鞭をつけ去月曜日の午後に日就社を訪はれき。而して訪はれての顛末は實に左の如し。咄し！何等の怪事ぞ！（女學雜誌第二百三號に據る）

○日就社を訪ふて

所謂る校名人名を一々質問したり、然るに主筆高田早苗君地方演説會に臨みて不在なる由に付、中井喜太郎氏に面會したり。氏は云く此の事實探報したるものは社員にあらずして社に關係あるものなり但し其の名は言ひがたし。校名及び人名は其の掛りの者出社したるのち、主筆と協議の上れ答へすべし。但し女學雜誌上に公載せらるゝときは、兼ての本志に違ふが故に甚だ迷惑なりと。吾人は云へ、承はりたる后ち之を掲載致さずとれ約束することは出來ず。但じ一應は夫々の女學校に問合せ、若し事實ならば之に忠告し、誤謬ならば之が爲に辨ずべし。何れにせよ公益の爲めに致すべきにつき、必らずしも御社の素志に違ふとなかるべし。故に之を女學雜誌に掲載すると然らざるとに關せず、讀賣新聞社説の末段に明記わりしものに據り、其の校名人名及び事實を承はれば足れりと。然るに中井氏は前述せる事情あるに由り、直にれ答へしがたしとあるに付高田君歸京の日書狀にて惠答を辱ふすと約して歸社せり。而して（月曜日）本誌の編輯を了するまでには、未だ其の答書を得ず云々。吾人は之を讀んで、大に讀賣記者の不德を悲しむ。

○益々奇なり

斯くも曖昧なる返答を爲し、斯くも漠然たる處置をなし而して又去十二日（水曜日）の紙上に於いて説を爲して曰く、余輩が事を記するや決して苟くもせず、親しく社員が目撃するか、或は最も信ずべき源より來りたる者にあらざれば記載せず、云々。余輩の記事を無實なりといはば言へ、余輩は確實と信ずる丈の材料に溌りて記したるが故に、毫も疚しき所なしなど。嗚呼果して然らば紙上に明記せざるも、女學記者の訪ひし時何故に之を示さゞる。益々奇なりといふべし。事實果して無根ならざれば、請ふ吾人だけにも之を示せ、吾人は誌上に掲載せで、讀賣記者のいふ所、確實なりと天下に公告せん。

（三月十五日脱稿）

○又

右脱稿し了つて、手許に達したる女學雜誌二百四號を見るに、左の記事あり。取り敢ず左に掲ぐ。

前號編輯を了れる後ち數日を經過し、八日に至り讀賣新聞主筆高田早苗君より來狀あり、中に云く、

……若し左の四條件御合の上は何時までも御話可申上候

一　御話申上候事柄に付ては何事によらず總て新聞雜誌等へ御載せ被下間敷事

二　御話申上候事柄他へ御洩し被下間敷事

三　本社へ事實の通信致し呉候者の姓名は御話し難致事

四　書載候事實の中一二件は特に事情あり御話し難致事

故に吾人は其後再たび該社ゑ行き其大畧を聞質したりと云へども但だ前四條を約そるによりて初めて聞得たることなるが故に止を得ず其事に付きて公言することなかるべし、然れども之を種として一層探索し吾人が耳目を用ひて承知したる事を公けにするは勿論の事にして、且つ吾人が爲すべきの義務なりと信ずるを以て、異日更めて之を記するとあるべし、吾人は本來秘密主義の無効なるとを信ド、甞ては日本大臣にして若し洲崎の開業式に臨まば之を天下に公告すべしと痛論し、且つ決心したるものなるが故に、苟くも其事實にして之れ有り且つ之れを隰露するの可なることを見ば、他日容赦なく公言すべし

寄書

○伊豆國熱海八景　東京　山田稲子

錦浦春曙

ほのぐと、霞のそこよ、しらみけり、
にしきの浦の、なみのあけぼの。

川名浪花

うちよする、川名のはまの、いはなみは。
七重八重さく、はなとみゆらん。

眞鶴過雁

しほかぜを、つばさにかけて、まな鶴の。
浦波とほく、かりなきわたる。

初島漁火

初しまの、なみまはくれて、ほのかにも、
みえこそわたれ、海士のいざり火。

温泉寺松風

尋ねきて、むかしをとへば、松風の、
しくるゝたとよ、袖はぬれつゝ。

和田山雪

旅ねする、草の枕も、さむからし、
けさ和田山に、ゆきそつもれる。

大島噴烟

伊豆の海、はれわたる日は、大しまの、
みねのけふりぞ、たまさりける。

網代歸帆

かへりゆく、わしろの崎の、まほかた帆、
一むらしろく、暮れのこりける。

○近詠數首　大阪　丹霞樵史

梅

吹れくる、たよりもうれし、さく梅の、
　匂をさそふ、春のゆうかぜ。

柳

さゝかにの、朝ひく糸の、それならで、
　のきはにかゝる、風の青柳。

鶯告春

雪もまた、消えあへぬ軒に、うつりきて、
　まつ春つぐる、うぐひすの聲。

花滿山

ひとつ色に、みねもふもとも、咲きみちて、
　松さへつゝむ、はなのしらくも。

舊詠二三

雪中早梅

大君も、みそなはすらん、うめつはの、
　雪にこぼるゝ、花の色香を。

郭公

つきふきて、尾上にひゞく、松風の、
　こゑのうへ行く、山ほとゝぎす。

一歲遊吉野

峯あまた、わけしひかずも、咲そむる、
　花にしらなみ、みよしのゝ山。

○豪傑數へ歌　長野　山口象陽

一とヤー　廣き世界に其名をば〱知らぬものなきワシントン〱
二とヤー　フランクリンは才と德〱并び備ひし人がかし〱
三とヤー　ミルトン、マコーレーは文筆の〱泰斗と仰ぎ望まる、〱
四とヤー　萬世迄も仰ぐなり〱希臘聖のソクラテス〱
五とヤー　今の世にてはビスマーク〱政治の大家と人は云ふ〱
六とヤー　昔の人のあやまりを〱ためしダーウヰンの進化論〱
七とヤー　何につけてもスペンサー〱碩學大儒と呼はる、〱
八とヤー　山もぬくべきナポレオン〱其名を今もとゞろけり〱
九さやー　コロンブス氏ノ大業は〱亞米利加開化の基なり〱
十とヤー　所は日の本秀吉は〱たぐひ稀なる豪傑が〱

○女學生ノ爲メニ悲ム　東京　和山仲

余ハ悲メリ、余ハ歎セリ、女學生ニ醜聞アルチ。余ハ聞キ厭キタリ、余ハ耳チ掩ハント欲ス、女學生ノ醜聞ニハ。事實カ、無根カ、之ヲ確ムル能ハズト雖モ、諸新聞ノ報スル所事實ラシク思ハル。假令事實トシテモ斯ル不德行者ハ實ニ僅々タル者ナルベシ。何ハ兎モアレ、此ノ醜聞ハ一般ノ女學生ニ大ナル損害ヲ與ヘ、將來ノ女子教育ニ幾千カノ影響チ與ヘシニハ相違ナカルベシ。斯ル不德行者アリトセバ、其ノ不德行者ノ爲メ幾百千ノ貞淑ナル女學生ハアラヌ罪チ蒙リ、幾百千ノ父母ハ苦惱セシナルベシ。惡ムベキハ不德行ノ女學生憐ベキハ貞潔ナル幾多ノ淑女。

試ミニ億ヘ、父母ノ學資チ費シテ女子ヲ學ビノ門ニ入ル、ハ何故ゾ、又タ巳レモ琴三味線ヨリ六カシキ英學ヤ家政學ナドチ學ブハ何故ゾ。地方ノ妙齢ナル女子カ、慈悲深キ父母ノ膝下チ離レ、親シキ友達ニ別レ、名殘リ惜サニ數行ノ涙ヲ揮ヒ、男子ニモ劣ラヌ豪膽モテ住ミ馴レシ故郷ヲ後ニシテ遙々上京セシハ何故ゾ、又タ父母カ愛テ慈シム朱タ乳臭キ女子チ心強クモ上京セシメシハ何故ゾ、醜聞チ買ハンカ爲メニモ非ヲザルベシ、品位ヲ落サンガ爲メニモ非ラサルベシ、只タ相當ノ教育チ與ヘ、以テ文明國ノ母タルノ資格チ行セシメ、以テ良家ニ嫁セシメント末チ樂ミテノヿナルベシ、自ラモ巳カ品位ヲ高メ、文明的ノ女子トナリタサニ、斯クハ奮發セシコトナルベシ。然ルニ其ノ結果ニシテ彼レモ不德行仲間ノ女學生カト評サレテハ、假令英學モ習ビ、家政學モ學ビ、オルガンモ覺ヘタトハ言ヘ、女子ニ最モ惡ムベキ最モ懼ルベキ醜聞ノ仲間ニ入レラレケハ又タ何ノ益カアル。女子ニ尊ブベキハ貞潔ナル操

テナリ、之レアレハ未ダ學ハザルモ學ビタルニ優ルベク、之レナケレバ學ロタリトモ學バサルニ劣ル。今ヤ府下ノ女學生ハ醜聞ヲ衣セラレ、螢雪ノ苦學モ水ノ泡トナリ、學バサルニ劣ルト言ハレントス、實ニ歎ハシキヿナラズヤ。

此ノ醜聞ノ爲メ地方ノ父母ニハ、折角娘ニ高等ノ教育ヲ與ントシ上京セシメシニ、斯ル醜聞アリテハ不安心ナリ、呼戻スガ得策ナラント相談スル父母モ生スベク、又タ上京セシメントセシモ思ヒ止マル人モアルベシ。然バ現在及ヒ未來ノ女子教育ニ多少ノ影響ヲ及ホセシト云フベシ。貞潔ナル女學生ヨ、卿等ハ實ニ不幸ナル哉、一二ノ不德行者ノ爲メニ大ナル損害ヲ蒙リ、女子ニ勢力ヲ與フル教育モ爲メニ障害ヲ蒙リシトハ。　嗟吁卿等ハ如何ナル計ヲナシテ之ヲ恢復セントスルカ、難ヒ哉、狂瀾ヲ既ニ倒ルヽニ回ヘス、然レトモ余ハ卿等ニ勸ム、男子ノ評スルマヽニ打任センヨリハ、自ラ進ンデ女學生ノ一大輿論ヲ形チ造リ、之カ制裁ヲ以テ不德行者ヲ撲滅スベシ。以テ一方ニハ父母ノ杞憂ヲ除キ他方ニハ已レノ地位ヲ高ムルニ務ムヘシ。人ハ境遇ニ支配サルヽモノナリ、而シテ女子程境遇ニ支配サレ易キモノハ非ラサルナリ、言ヲ替ヘテ曰ヘバ、女子ハ境遇生活ヲナスモノナリ。故ニ卿等貞潔ナル境遇ヲ造ラハ、溷濁セルモノモ之ヲ雪ノ如ク霜ノ如クニ感化セシムルハ難キニ非ラサルナリ。

余ハ國粹保存論者ニ非ラズ、然ルニ少シ教育ヲ受ケタル女子ガ、徒ニ泰西ノ外形ニ心醉シ、男女同權トカ、男女交際トカヲ喋々スルヲ欲セサルモノナリ。女學生ニ醜聞アル位ノ日本ノ狀態ニシテ男女同權ハ、サテ置キ、男女交際ダモ許スベキ時ニ非ス。最愛ナル卿等ヨ、須ラク已レノ操行ヲ收メ、實學ヲ勉メ、以テ地位品格ヲ高メ、文明國ノ母タルノ資格ヲ供ヘヨ、然ラハ求メズシテ男子ヨリノ尊敬ヲ得ン。是レヲ之レ察セズ、猥リニ男女交際ナドヲ唱ヘ、醜聞ノ種ヲ蒔キ、男子ニ蔑視セラルヽハ余ノ贊成スル能ハサル所ナリ。

余ハ此ノ度ノ醜聞ニ正義ノ士ハ徒ニ女子ヲ責ムルノ酷ニシテ、男子ヲ責ムルノ薄キヲ怪ム。女子ノ不德者ハ之ヲ恕ス可カラズ、之ヲ責ムルニ酷ヲ以テスベシ、男子ノ不德者亦之ヲ恕ス可カラス、之ヲ責ムルニ酷ヲ以テスベシ。世ノ論者ノ攻擊ハ女子ニ強ク及ブモ、其ノ論鋒對手タル男子ニ及ヒシヲ見ズ。何故ニ男子ヲ恕シテ女子ヲ恕セサル、余ハ兩ツナガラ之ヲ筆誅セント欲ス。余ハ女學生ノ內幕ヲ知ル能ハズト雖𪜈、其ノ不德行ナルモノハ實ニ僅々タルモノナルベシ。余ハ男生ノ內幕ヲ知ル、彼等ガ校舍ニテ三々五々相屯シ、聞クモ汚ハシキコトヲ喃々喋々スルヲ見ル。然ルニ之ヲ筆誅スルモノナキハ何故ゾ。余ハ之ヲ知ル、品行正シキモノガ、少シ不品行ナルコトアレハ針小ノコトモ棒大ニシテ珍シク之ヲ話スベシ、然ルニ放蕩モノガ不品行アルモ之ヲ聞キ流シテ耳ニ留メサルベシ。女子ハ常ニ品行端正ナルモノト認メラルヽヲ以テ少シノコトモ言ヒタガルナリ、是レ一般女學生ガ操行淸キ證據ナラズヤ。余ハ女學生ノ爲メニ之ヲ喜ブナリ。而シテ斯ル不德行ナル女學生アルモ之ヲ筆誅スルモノナカッセバ倍々氣儘ノ不德行ヲナスベシ、然ルニ隱々タル輿論ノ制裁ハ不德行者ヲ惶懼狼狽セシムベシ。之レ余ガ論者カ少シモ假サス、攻擊スルヲ一般女學生ノ爲メ喜ブ所ナリ。又タ不德ノ念慮ヲ起スモノアルモ、覆ヘリシ前車ニ鑑ミ、強テ抑ユル人モアルベシ。之レ余ガ論者ノ攻擊ヲ一般女學生ノ爲メニ喜ブ所十リ。

夫レ今日ノ女學生ハ將來文明國ノ母トナルベキ人達ナリ。余ハ知ル將來ノ日本ヲ組織スル有爲ノ士ハ、今日ノ女學生ノ子タルヲ、何トナレバ人ノ賢愚ハ母ノ保育感化　如何ニヨルト泰西ノ學者モ言ヒ、孟母三遷ノ教ト支那ノ學者モ云ヘル如ク、士ハ母ノ慈愛、談話、擧動、等ノ感化如何ニヨリ賢トモ愚トモナル者ナレバ、高等ノ教育ヲ受ケタル女學生ハ、他日有爲ノ士ノ母タルベシ。然シテ是等有爲ノ士ハ、將來ノ日本ヲ益々文明ノ域ニ進マシムルモノナルベケレバ、燦爛タル文明ノ日本ヲ生ムモノハ現今ノ女學者ナリ。因是見之、今日ノ女學生ハ腐敗セル社會ヲ生ムヿモ得ベク、[illegible]的ノ社會ヲ生ムヿモ得ベク、皎潔ナル社會ヲ生ムコトモ得ベク、平和的ノ社會ヲ生ムコトモ得ベシ。果シテ斯ノ如シトセバ、女學生ノ一擧一動カ、愛國者ノ消長ニ關スル大ナルヲ知ルベシ。斯ル責任アル女學生ニシテ、斯ル醜聞アル豈ニ悲マサルベケンヤ、嗟吁貞淑ナル姉妹ヨ、卿等早ク猛省セザル可カラズ、卿等ノ一言一行ハ將來ノ日本ノ社會ヲトスルノ價値アルゾ。

孝女於清の傳

中川ふかし

播磨國網浦と云へる地に、於清となん呼へる少女ありける。さいけなきころ、父をうしなひて、母の手一つに人となりぬ。天性至て温順なる質にて容姿も亦みにくからす、村人擧て稱へあへり。此兄を惣八と云ふ、於清とは同胞なれとも、打てかわりたる放蕩無頼の男にて、日々酒を飲み色に耽り、賭博をのみことゝして、少しも己か産業をとらす、父祖より持ちつたへたる田畑をも、大方は賣盡してつかひはたしゝかば、於清は之をうきことに思ひて、しば／＼諫め歎けとも、少しもきゝ入るゝ氣色あらす、母も憂のあまり遂に病に臥すに至りぬ、かくて過ゆく程に、家計はやう／＼貧しくありもて行きて、今は朝夕の烟たに立てかぬるまてになれり。於清はとかう打案しつゝ、思ふやう兄の行ひは我等いかに云へはとて、悛むべきやうなし、もし此まゝに打過きなば、遂に母子路頭に餓死するに至りぬへし、此上は村長の許にゆきて、兄の始末を訴へ、れたそかに之をときさとさんことを乞ふにしかし、とてひそかに其由訴へ出てけれは村長は惣八をよびて誡めさとしけれとも、之を用ひさるのみかは却て妹の己か惡事を吹聽するか面惡しとて、憤りたり。其後惣八はやう／＼に酒色の資乏しくなりゆきしかば、遂に惡計を案し出しつ、於清に云ひけるは、御身の見らるゝ如く我等かく貧窶にせまりて、母上の御惱みあるも、藥さへ求めまゐらせん樣なし、御身まことに孝道をつくさんとならば、恥をしのひて暫く其身を室津の妓樓にしつめ、そこばくの金を得よかし、然らは我等必よき醫師を迎へ、又貴き藥をも購ひて一日も早く母上の御なやみを免れたまふやうなさんといふ。於清は之をきゝて打なきつゝ、答へけるは、母上の御爲とならは、いかなる憂き目をも厭ふまじく、又兄上の御言にもつゆ背かんとにはあらねと、知らるゝ如く己今家を去りなは、かくまて惱め玉ふ母上の御介抱をば誰かなすへき、他の事は何にても御言に從ひなん、是のみはとてかたく辭みしかは、兄もさまては強ひかね、さらばとてやみぬ。

かくて四五日を經しか、兄は又云ひ出てけらく、此近き里なる大身某、御身の容色をめてゝ、しはしの間にても傍に侍せしめたしと言へり、程近き處にて母上の御介抱は折々歸りきてなすも妨けなかるべければ、左程に不自由とも思召すまし、何事も母上の御爲そ、且御身のなき折は我等かわりて必よく御介抱にし參らんとて强ゆ。於清は兄の腹黑き謀はよく／＼知り居れとも、言ひ爭へはとて思ひ止まるへくもあらねは先つ暫くは待ち玉へ、母上にも話せし上にて、兎も角もせんと云ひて一時を逃れしか、此上は迚も我力にて如何ともせんやうなし、いて我身をすてゝ、神の御救にすがり、第一には母の御惱みの忘らんこと、又第二には兄上の行ひを悛めしめ玉はん樣、願ひ參らんと夜な／＼人知れす、近きほとりの村社に詣てゝ、一心に祈請をこめ居たり。かくすること二十日にも及ひしか、誠を照らす神、このあはれなる少女の心や照覽ましけん、母の病はやゝ快き方に向ひ、兄も此頃はいつに似す、折々家にありて母をとひ慰め、且はさきに勸めし於清か身の上の話さへ、今は迫らすなりぬ。於清は此有樣を見て天を拜し地を拜し、淚を流して喜ひつ、是全く我命を捧けて祈たる靈驗ならめ、此上生きながらへなは、天罰はかり難しとて、ひそかに是迄の有樣をこま／＼認めたる一書を遺して、家を出て社に詣てゝ、其ほとりの松の枝に縊れ死したりけり。其時年僅に十七才なりし。遺書には懇々母と兄とに我身の不孝不悌をわぶる旨を記しあり、一字一淚見るもの鼻打かまぬはなかりしとそ、於清かなす處恐く中行とは云ひ難けれと、世には相應の學問をも修めながら、孝悌の道をは空ふく風にきゝなすも多けれは、誡め草にもときゝしまゝをかくなんかきつゝりぬ。

○稟告　謹で美作の山中常子孃に謝す孃の嘗て寄送せられたる觀月記の一編二十號へ掲載せんが爲め記者神田の別宅に於て點削に從事したる際恰も火災ありて其の稿全く祝融氏の奪ふ處となれり再び寄贈せらるれば幸甚

國のもとゐ第二巻第十二號

明治二十三年三月一日發兌

目錄

本紙の定價

	市內配達無料	市外郵稅共
一冊……	八錢	八錢五厘
六冊半ケ年	四十五錢	四十八錢
十二冊一ケ年	八十五錢	九十一錢

毎月一回(一日)に發兌

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地　興文社

東洋學會設立ノ主旨

維新以來奎運隆興學術革新專ラ西洋ノ所長ヲ資リテ以テ吾進修ヲ圖ルモノ駸々乎トシテ止ムベカラザル勢アリ於是乎一時風尚ノ向フ所彼ヲ尊ヒ已ヲ卑ミ東洋固有ノ學術ニ至リテハ概シテ迂濶トナシ捐テヽ顧ミザルニ至ル抑々東洋ノ學術ハ其由來スル所最久シク之ヲ西洋ニ比較シテ互ニ美惡長短ノ差ナキニ非スト雖若シヨク其會通ヲ觀テ取捨ノ宜シキヲ得バ豈開物成務ノ大業ヲナサヾランヤ顧フニ今日之ヲ講討研尋シテ以テ互濟ノ美ヲ致スモノ抑亦東洋學者ノ任ニ非ズシテ何ゾヤ故ニ我輩相謀リ東洋學會ヲ設立シ專ラ本邦及ヒ支那及ヒ印度等ノ學術ヲ研究シ之ヲ西洋諸邦ニ參シ其美惡長短ヲ講明シ長ヲ取リ短ヲ捨テ美ニ就キ惡ヲ去リ固陋ノ僻習ヲ除キ開明ノ隆域ニ逢セント欲ス翼クハ大方ノ君子共ニ此擧ヲ贊助シ陸續加盟竟ニ本會ノ主旨ヲ貫徹シテ以テ國家ノ奎運裨補センコヲ

規則要略

第一　本會ノ目的ハ本邦支那及ヒ印度等ノ事物ヲ尋繹シ博ク學理ヲ研究スルニアリ

第二　本會ノ事務所ヲ東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地ニ設ク

第三　會員タランコト欲スルモノハ其族籍姓名住所ヲ詳記シ本會事務所ニ報知アルヘシ

第四　會員ハ會費トシテ毎月金十錢ヲ前納スヘシ但數月分取纏メ郵便小爲換或ハ郵劵ヲ以テ送付アルモ妨ナシ

第五　會員ニハ毎月發行スル雜誌ヲ無代價ニテ配付ス但二部以上ノ配付ヲ要求スル時ハ一冊ニ付金五錢ヲ納ムヘシ

第六　本會ハ臨時ニ演說會ヲ開クモノトス但會場ハ其都度幹事ヨリ報告スヘシ

第七　會員ニシテ論說考證等ヲ寄送スルトキハ編輯掛ニ於テ之ヲ採擇シ本會雜誌ニ登錄スベシ

二

第四編第二號目次左ノ如シ

會告

本誌見本御入用アラハ一冊郵劵九錢ニテ呈スヘシ

發行所　東洋學會事務所
東京々橋區南傳馬町一丁目十二番地

明治廿三年二月廿八日發兌
經政法理第貳號

目録

發行所　大坂市東區今橋五丁目百番屋敷　學而會事務所

三十

博聞雜誌第五十六號目錄

論說○假名文字ヲ增加スベキノ議　松本貢○壺切御劍考　內藤燦聚●寄書○古代人民ノ敬スル神ヲ論ズ　井上斧作●歷史○藤房卿ノ諫言書○楠氏ノ異聞○淺野內匠家來ノ口上書○煙草ノ起原●傳記○詩伯森春濤先生ノ傳(完)○新島襄氏ノ傳ノ補遺並ニ正誤●天文○彗星○七曜推時表●地理○美濃國久々利ノ太古ノ遺跡○安德天皇御陵ノ所在地○武藏國杉田ノ梅林●人事○親任官及勅任官ノ現數○東京ノ人口○一家ノ年數千歳ノ疑○世界第一ノ老人○米國婦人ノ財囊力○男女ノ腦量○言語ノ聞誤リ●農業○最良ノ新術種○鼠嫌草ノ特効○英國ノ雞卵●工業○電氣ノ世界○大鐵道布設ノ計畫○速記器機ノ發明○滑舟機ノ發明●商法○昨年中ノ外國貿易○正貨ノ出入○朝鮮國德原府下金利ノ割合●衛生○食物ノ改良○蛇玉ノ劇毒○アイノ婦人ノ蛇狂○肺癆ニ熱氣吸入ノ成績●教法○佛教西漸○一切經ノ西渡○昔シノ御影參リ●文籍○大日本帝國圖○園藝考○朝鮮ノ通俗文ノ書○二百年前ノ借金證文○西洋家著述ノ收益●貨物○昨年中ノ世界黄金産出高○粉末石灰ノ利用○僞造漆●雜事○支那新年ノ景狀○肥後國秋山ノ鍊倉○傳書燕ノ試驗○鼠ヲ捕ル良法○モルモットノ流行○盜賊羅歷○奢侈ト節儉●廣告　數十件

東京々橋區弓町十番地

發行所　博聞雜誌社

北陸婦人教會雜誌第五號

四

目次

○會白

○說教

特別教會女子部に於て　文學博士　南條文雄

○法話

婦人教會に於て(承前)　不二門諦觀

○傳記

惠燈大師の御傳　其三

○宗教小說

金谷館　第一回　瑰堂散史

○雜報

福田會惠愛部發會式演說●軍人法話●タンマパラ氏と阿滿恒子との對話

○會報

報恩講と追吊會●本會々堂及ひ佛教女學校新築の發令孃附屬美術部

○本會廣告

○廣告數件

石川縣金澤市西町三十三番地

本願寺廟所內

北陸婦人教會本部

○矢野文雄龍溪先生閲○井上寛一君
○枝元長辰君○村井寛君同編

○洋裝全一册○總クロース金文字入美製本○紙數五百頁余○定價金九十錢○實價金七十五錢○郵税金十錢

廿三年版

内外 百事便覽

報知社藏版

近來世人の便益に供する書籍陸續輩出すれども其中最も多く實用に供せられて江湖の喝采を増せる者は此百事便覽に如くものなかるへし、此書は西洋のアルマナック、又はカレンダーに倣ひ毎年歳首に刊行する者にて上は諸法令諸規則より内外各國の統計類を初めとし、海陸船車の賃金里程、朝野伸士の姓名宿所、全國の新聞雜誌、諸税の税率等より下は日常の雜文に至るまで社會萬般の事實を掲載して細大一も漏す事無し、其外に現時最も世人の注意すべき各國の議員撰擧法を載せ又和漢洋を對然せし年代記をも附したれば如何なる事をも一目の下に知り得べく、諸種の事實を一時に調査し得べく、家に備あるも旅中に携帶するも其利其便實に言ふべからざる者あり、左れば昨年の春始めて第一版を刊行せし時は大に世人の賞賛を博し諸大家より我邦のアルマナックとの褒辭を蒙むれり然れども當時は何分手初めの事なれば材料の蒐集等に非常の困難を極め偏纂の手都合意の如くならずして書中誤脱の件も尠なからざりしが本年は早くより其準備に取掛り充分綿密に調査を盡したる故本年新刊の分は昨年の分に比して記載の項目に非常の増加あり又在來の記事を訂正増補せし廉々最も多し、江湖の諸君一本を得て多年の不便を免るべし

出版發賣所　東京日本橋區大傳馬町貳丁目廿貳番地　長島恭三郎

各府縣取次書肆

○東京丸善書房○仝博聞社○仝敬業社○仝集成社○仝辻岡文助○仝柳原友吉○仝吉川半七○仝大倉孫兵衛○仝林平次郎○仝水野慶次郎○仝小林喜右衛門○仝小林新兵衛○大坂松村九兵衛○仝梅原龜七○仝前川善兵衛○仝吉岡平助○仝熊本長崎次郎○山形五十嵐太右工門○福島萱間左右太○西京藤井孫兵衛○名古屋三輪文次郎○水原西村六平○三條樋口屋小左衛門○長野西澤喜太郎○松本水琴堂爲吉○富山眞田善次郎○仙臺高橋藤七○仝伊勢安右衛門○水戸川又銀藏○佐原正文堂○甲府五明堂正八○鴻巣長島爲一郎

◎第二版出來

松永伍作述

改正増補 養蠶術講義　全一册

蠶糸業組合中央本部幹事　鈴木善恭校閲
仝　員　大塚良太郎著

蠶業家必携　全一册

右ハ從事蠶絲業組合中央本部ニテ發賣致來候處今般弊店ニ於テ販賣方一手ニ引請申候就テハ直段等モ精々廉價ニ可仕候間多數御注文被仰付度候殊ニ蠶業家必携ノ義ハ板權讓受候間尚一層御愛讀奉願候敬白

埼玉縣鴻巣町　長島本店
東京大傳馬町二丁目　長島分店

注意

お勸めに從ひ次號より質疑といふ欄を設け、汎く讀者諸君に便せんと思ひます。政治に關する事、淫猥に涉るもの、外總て學術上、社會上の事、何でも彼でも諸君の不審のあるものは、遠慮なく御問へなさい。各專門の大家に依賴して置きましたから、親切に丁寧に、公平に、確實に、諸君の滿足の出來るやうに、紙上にて御答を致します。但し御問ひになる時にハ、文字ハ明瞭に楷書で書き、郵便の不足、若しくハ先拂ひなき樣注意して下さい。

投書規則

本社に於ては今般投書規則なるものを設け、汎く投書を望む左の條々御一覽の上、筆硯に從事せらるゝ諸子は御投書あれ。

一、必ず學術の範圍を超ゆべからず。政事に亙るものは止むを得ず沒書とす文藝雜錄批評など最もよろし

一、必ず亂書すべからず。如何に面白き者にても、亂書讀みがたきものは沒書とす（半紙ならば一枚十行美濃紙ならば十三行位に認むべし）

一、是迄往々寄送し來れるものにして郵便先拂、若しくは不足等あり爾後斯くの如きは返戻すべし。

一、雜誌に掲載したるものには其價値に循ひ相當の報酬をなすべし

一、單に原稿のみと寄送せらるゝものは、郵筒に「生文社編輯係御中」と認むべし。

一、原稿取捨は編輯係に一任すべし、決して其返戻を申込むべからず。

一、掲載の遲速も編輯の都合に依れは決して催促すべからず。

明治二十三年二月

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地
生文社

（遞信省認可）

明治二十三年三月十八日印刷出版

（東京神田區柳原河岸錦巷堂印刷）